

## 知的活動に対する畏敬の念

飯 田 経 夫

思いもしなかつたかわりが、大平さん（と、親しみをこめて呼ばせていただきたい）と私の間にできたのは、昭和五十四年はじめ、私が政策研究会の研究員を仰せつかり、とくに環太平洋連帯研究グループに加わつたためである。同グループ議長の大来佐武郎氏が途中で外務大臣に就任されたため、私は議長代行として、中間報告書（五十四年十一月）と本報告書（五十五年五月）を、会議席上で直接総理にお渡しする光栄に浴したし、事前説明のために瀬田のお宅へうかがつたりもした。

本報告書をお渡しする総会が官邸で開かれたのは五月十九日で、内閣不信任案成立のわずか三日後のことだった。もともと私は、議長代行としての挨拶の最後を、「環太平洋構想の寿命は、どう考えても大平内閣の寿命よりはるかに長いと思います。そういうすばらしいテーマを研究する機会を与えていただいたことに対して、研究員一同心から感謝しています」という形で、結ばうと考えていた。

しかし、突然の内閣不信任の直後では、前段はユーモアにもならないから、当日はそれを削って後段だけにした。ところが、私の発言が終つて二、三秒間があつただろうか、大平さんが「ただひとつの善政になるかな」とつぶやくようにいわれたのに、瞬間ドキッとした。お顔には微笑が浮かんでいたように思う。

あとから考えると、この時すでに、大平内閣の寿命どころか、大平さんご自身のご寿命すらあといくばくもなかっただけに、あの瞬間の印象はいまになって、よりいっそう強い。だが、いまや大平さんは亡いけれども、環

太平洋構想はこれからである。歴史の趨勢に対する深い洞察にもとづいて、日本の「平和外交」の大きなビジョンを確立しようとしたその遺志は、紆余曲折はあるかもしれないが、着実に実を結んで行くにちがいない。そして私自身、今後そういう流れと無関係な生き方はとうていできないだろうと、強く予感している。つまり、あの瞬間の大平さんのつぶやきと笑顔は、私の胸のなかでは、今後ますますふくらみつつけるだろう。

話はもどるが、報告書提出の総会后、別室でささやかなパーティーがあったが、その席上で大平さんは、機智あふれる冗談がとどまるところを知らず、ほんとうに楽しそうだった。強行日程の外遊直後に政局急変で、精神的にも肉体的にも疲労の極のはずなのに、じつにタフだな　と、その時は感心したけれども、いまはもっと複雑な気持ちで、あの楽しいパーティーのことを思い出す。

直接、接したのはごく短期間だが、私にとって大平さんは、学問　または人間の知的活動に対する畏敬の念を、最後まで失わなかった人という印象が強い。ほとんどの人は、現実にもまれるなかで、しだいにそういう気持ちを失って行く。学問を職業とする私自身、青年時代と同じ情熱を保持しているかと自問すると、内心忸怩たるものがある。

いったいあの畏敬の念は、どこから出てくるものだったのだろうか。私にとって、それはいまも大きな謎である。こういう人にめぐり会えたことは、私の人生にとって、ほんとうに大きな幸福であった。

(名古屋大学教授)